

談話室

プリンストンで考えたこと

総合政策学部教授 岡部光明

この春休み、米国プリンストン大学に滞在する機会がありました。かなり昔（14年前）ここで1年間教壇に立ったことがありますが、それ以来訪問する機会を得なかったので、今回はいくぶん感傷的な旅行でした。

学生食堂で聞こえてくる会話は、雑多なトピックながらいかにも大学生の会話らしいものです。これはSFCと同じです。一方、このキャンパスの建物の多くはゴシック様式の石造りであり、また高い尖塔もあるなどヨーロッパ中世に逆戻りした錯覚を起こします。この点は、すべてモダンな建築のSFCと何と対照的でしょうか。一口に大学といっても、いかに異なった風情がありうるかを改めて感じた次第です。

ところで、プリンストンはむろん研究系の大学として有名です（在籍者からノーベル賞受賞者をこれまでに15名出しています）。しかし、とくに重要なのは、学部学生に対する教育こそ大学の役割の核心である、という方針を大学が堅持していることです。ちなみに学生数をみると、学部生が約4,600名、大学院生が約2,000名であり、米国の他の多くの有力大学とは異なって学部生が圧倒的に多いことにそれがよく現われています（なお学部生対大学院生の比率や学生総数といった面ではSFCにたいへん近いといえます）。

広大かつ歴史的なキャンパス環境と贅沢な教員数を擁している点でSFCとは大いに異なりますが、高い評判を得ているここでの学部教育が果たしてここでのようになされているのか、またそのカリキュラムあるいは仕組みの面でSFCにとって何か参考になる面はないのか。このような観点から今回プリンストンの仕組みを調べてみました。

たまたまですが、これと全く同じタイミングでSFCでは「カリキュラムに関する対学生アンケート調査（特別調査）」の結果がまとまり、先般内部に公開されました。この調査は、SFCカリキュラムに関する調査のなかで、多分これまでで最も網羅的かつ回答分量の多い調査ではないでしょうか。学生による回答結果をダウンロードしてプリントすれば約180ページ（およそ書物1冊分の分量）にも達する膨大なものになります。早速それを一読したところ、重要な情報が多く含まれていると私は思いました。

このアンケート調査で浮かび上がってくる SFC の課題と、私がプリンストンから得た示唆を重ね合わせると、今後の SFC にとって幾つかの方向が見えてくるのではないかと私は感じています。議論の詳細は省きますが、SFC での議論を活発化させるため、幾つか具体的なことを記しておきたいと思います。すなわち、アンケートをみる限り、専門性の強化や基礎学力の涵養を図ることが、カリキュラム改善のうえで大きな課題として浮かび上がっているようにみえます。もしその理解が正しいとすれば、私見では、具体的には全授業の週 2 コマ化、卒業製作の必須化、政策立案セミナーの導入、履修科目に関する教員アドバイザー制度の充実、といったことがらが欠かせない検討課題になります。

上記はあくまで個人的提案に過ぎませんが、より重要なのは、カリキュラム改善委員会がまずこの調査結果をていねいに分析し、全体として何が読み取れるかをまず報告書としてまとめること（課題について教員の共通理解を得ること）、そして改革の理念を明確化（ないし再確認）すること、この二つが必要かつ第一のステップになるのではないのでしょうか。そのためには、例えば、全教員の討議集会（アゴラ）を春学期中に一度といわず開催し、全教員が調査結果と課題の理解を共有することから始めるのが望ましいと思います。それだけでも多大の時間とエネルギーが要請されることでしょう。科目の統廃合や名称変更、あるいはカリキュラム構造改革といった改革の具体化は、その次の段階にくるべきものと思います。

SFC におけるこれまでの取運び方から推すと、いきなり上記第二のステップが採られるのではないかという危惧を抱きます。そうした場合には、声の大きい方が勝つという結果になり、現在すでにそうなっているように、カリキュラム全体の整合性や理解しやすさといった面に再び禍根を残すのではないのでしょうか。初期の SFC は、常に理念にしたがって万事対応したからこそ他大学の追随を許さなかった、と一般に評価されています。改革の理念を明確にしないまま、いきなり交渉過程に入るとすれば、羅針盤のない船と同様、どこに行き着くのか不安になります。

カリキュラムの改善は、SFC の基本的姿を対外的にも対内的にも問いなおす作業であり、また全教員が直接影響を受ける大事業です。SFC が「問題発見・解決」型の研究および教育をモットーとする以上、カリキュラムについてもこれを基本方針としてまず課題と改革理念を明確化し、次いでそれに対する具体的対応策をデザインする、という二つの明確なステップを踏んで斬新なものを作っていくべきではないのでしょうか。プリンストン滞在中にこのように考えた次第です。